

# 文化政策の意義

マルシェノルド編集主幹 小磯 修二

文化資源を活かした地域振興を進めていくために大事な政策は何だろうか。東京大学の小林真理教授へのインタビューで、重要なのは気付きたと教えられた。文化とは人々が創り出したもので、日常の営みの中に広く浸透している。足もとにある幅広い伝統、営みを地域の文化資源として見つめ直し、その大切さを広く共有しながら、地域の資源として活かしていく挑戦を支えていく地域政策が必要だろう。

7月27日に、北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産への登録が決まったが、その道のりは大変長いものだった。4道県が、最初に世界遺産登録を目指したのは14年前だが、当初の文化庁やユネスコは慎重で、地元の関係者は津軽海峡を挟んだ文化圏の一体性や周遊で生まれる魅力、保存の良好さなどをていねいに訴え続けてきた。あまり注目されることがなかった縄文文化遺跡を世界文化遺産にまで高めていくことができた原動力は、遺跡群を地域の資源として活かし、次世代に継承していこうという地域の人々のねばり強い努力であることが取材を通じて伝わってきた。

ところで、1970年代末に大平正芳総理による田園都市国家構想の提起で、「文化の時代」が大きな政治テーマとなった時期がある。当時、私は国土庁で全国総合開発計画の担当で、「文化と国土設計」をテーマにしたセミナーをお手伝いしたことがあった。その時に聞いた、小松左京氏の「日本史における文化行政」という講演を思い出した。小松氏は『日本沈没』などで有名なSF小説家だ。精力的に膨大な資料文献を読みこなして書き上げる博識の作家で、当時は大平総理の政策研究会の文化の時代グループの委員でもあった。最近では、半世紀も前に書いた『復活の日』でコロナ危機を予測していたことで、その慧眼に注目が集まっている。

久しぶりに彼の講演録を読み返してみた。文化行政の視点から、わが国の国づくりを骨太に論じている。文化を国の地方統治に最初に活用したのが律令制の国分寺政策であり、大胆な地方分散を展開したこと。足利歴代将軍は、積極的に「文化リーダー」を志向し、文化的規範により国を治めようとし、そこで全国に魅力のある小京都が生まれたこと。さらに、外来の文化要素を巧みに取り入れながら日本文化を飛躍させた織田信長の手法など、独特の視点での分析を試みている。最後に、彼は、文化というのは生きている深みに接することで振る舞いや考え方が変わり、それによって無用な摩擦を避け、結果として社会の運営効率が高まるもので、そのような文化の充実こそ国の責任だと述べている。

40年以上も前の講演だが、文化政策に真剣に向き合うことが、混沌と対立の世界を生き抜くための知恵というメッセージは、ポストコロナに向けて模索する今の時代に向けられているようでもある。